



日暮 高則 (財団理事)

会いたいと思っていた友達が

「故人」になっていた時の辛さ

小生はもう64歳。これまで生きてきた中で、数多くの友人ができて、そして彼らに助けられてきた。みんな思い出深い人ばかりだが、特にこの中でも忘れられない友人、先輩が4人いる。なぜ忘れられないかと言えば、彼らはいずれも「故人」であるからだ。



ここでは4人すべてを紹介する紙幅はないので、一人だけ、高校時代の親友S・S君だけを取り上げよう。彼は高校1年生のときの同級生だった。背が高くハンサムで、しかも頭がいい。佐倉市の中学校時代はサッカー部のスター選手とのことで、女性にはもてたようだ。金持ちの子供にありがちな、ちょっと気取った雰囲気があったけど心の温かい男で、なぜか小生とは馬が合った。

彼と仲良くなったのは、一緒に山登りしたことがきっかけだ。よく神奈川県丹沢山塊の沢登りに出かけた。表丹沢水無川本流にある20メートルくらいの滝わきの岸壁を彼はするすると登って行って、上から「日暮、どうした。登ってこいよ」と声を掛けてきた。小生は、怖くて岸壁を登れず、滝の近くにある山道(通称巻き道)を歩くしかなかった。

そんな彼と高校2年生のとき2人きりで南アルプス甲斐駒ヶ岳(標高2,967m)に出掛けた。ちょっと無謀だったかも知れない。山小屋に泊まって頂上を制覇したのはいいが、そのあと下山途中で霧(山ではガスと言う)にまかれてしまった。早く視界が確認できる場所までと、必死になって下山しようとして急ぎ過ぎたためか下山コースから外れ、道に迷ってしまった。一寸先も見えないガスの中で、途方に暮れた。

そのとき、S君は「よし、僕が下山ルートを探してくるから、日暮はここで待っている」と言ってすたすたと登り

返して行った。小生は一人になって極端に不安な気持ちにかられ、「ひょっとしたら、僕はここで死ぬのではないか」とさえ思った。30分くらい経つだろうか、彼はガスの中を戻ってきて「日暮、道が分かった。行こう」と言って先導してくれた。ある意味、命の恩人だ。感謝してもしきれない。

卒業後、彼は東北大学に進み、寮生活をしていた。その時も小生は仙台に遊びに行っているいろいろ世話になった。だが、2人ともサラリーマン生活に入ると、忙しさにかまけて音信が途絶えてしまった。50歳過ぎになって、小生もやっと昔のことが懐かしくなり、「S君に会いたいな。もう一度人生のことなどゆっくり話したい」と思ったが、所在が分からず、そのままにしていた。そんな折、高校同窓生向けのホームページに彼の訃報が載った。死因はガンで、還暦前の旅立ちだった。佐倉市の葬儀会場に駆け付けて、お棺の中の彼を見たときはショックだった。いつもニコニコしていたハンサム顔、ちょっと気取った風の彼のかつての面影はなく、80歳過ぎの老人にも見えたからだ。小生は、とめどもなく涙があふれ、「生きている間に会って話したかったよ。訪ねなくてごめんね」と語りかけた。

小生がなぜS君と積極的に連絡を取ろうとしなかったか。それは、まだ還暦前なので、彼も仕事忙しいのではないだろうか。そのうち、定年を迎える65歳くらいになれば、ゆっくり話せるのではないかと勝手に考えたからだ。まさか死が迫っているなどとはみじんも思わなかった。少なくとも彼が病魔と闘っていた時、小生が訪ねていけば、話ができて、励ますこともできたはずだ。その点が悔しくてならない。

この件で得た教訓。親しかった人、世話になった人はいつでも連絡を取れるようにし、できれば数年に一度でも会うことだ。死んでからは、感謝の気持ちは伝えられない。友達でいたいのなら、音信を絶やしてはならない。絶えず連絡を取り合い、君のことは忘れてないよとメッセージを送ることが重要だ。

OB会～inカンボジア

11月15日～19日：カンボジア在住のOBが全員参加してくれて、盛り上がった会になった。アンコールワット、シアヌークピルの観光も楽しかった。何より嬉しかったのはOBが高い志のもと、元気で頑張っていることだ。

皆さん、いろいろありがとう!!



金 載烈 (奨学生) 韓国 (釜山)

東京大学 新領域創成科学研究科 人間環境学専攻

日本での留学生生活において

苦しかったことと嬉しかったこと

2008年韓国で初めに過疎地域の公共交通手段として、DRTシステムを適用する方案に関する研究結果を学会に発表しました。しかしながら、韓国においてはDRTシステムが導入されている地域がない上に、研究事例もないため、研究を進展させる上で大きなハンディとなっていました。日本においては、DRTシステムが何年も前から導入されており、研究も盛んであり、韓国での在学中に日本語を独学で学び、日本で発表されている論文を読むうちに、日本への留学を希望するに至りました。特に東京大学の和研究室においては、世界最先端のDRTの研究を進めており、東京大学に入学し、世界最先端のシステムの研究に従事したいと考え入学を準備しました。

しかし、その当時、父は退職や円高の影響を受け、仕送りも期待できない状況でしたので、日本に留学すること自体を迷いましたが、研究したいテーマや明確な目的意識があったので、勇気を出して私費で留学することを決心しました。思ったより、留学の初期生活は大変でした。言語の問題や経済的な問題などで、研究に集中もできないし、バイトする時間的な余裕もなかったため、毎日の生活を維持することで精いっぱいでした。留学生にとって経済的な問題は大きな問題ということを実感し、留学生活の中で一番苦しい時期だったと思います。その中で、清峰奨学財団に応募し、合格したので、2年間は心配なく、研究に集中することもできて、研究活動や研究成果を出すことができました。

留学の初期生活に大変なこともありましたが、日本に留学して嬉しかったこともたくさんあります。韓国では研究環境が揃っていない研究テーマを選んで研究に苦労しましたが、今属している研究室では国内の様々な自治体を回りながら、オンデマンド交通を導入するための事前調査、導入設計、事後評価まで自分が知りたかった全てのことを経験することになりました。

2011年から岡山県瀬戸内市に市政戦略アドバイザーをわたり、2012年には地域交通会議委員に任命され、瀬戸内市民の足を確保するために様々な活動をしています。オンデマンド交通を導入した後、地域の高齢者の方々から感謝の言葉を頂くとき、一番やりがいや嬉しさを感じました。

研究活動以外にも自分が留学の初期生活が大変だったので、2011年に韓国人の留学生が初期から安定的に留学生活を過ごせるように東京大学柏の葉キャンパスに韓国人留学生会を立ち上げました。それで留学生活のノウハウや情報などをシェアし、問題があるとき一緒に解決しています。去年からは東京大学韓国人留学生会第40期副会長に任命され、柏の葉キャンパス内で韓国語教室をつくり、ボランティアで韓国語を教えながら地域住民と交流をしています。

卒業後も色々な方から頂いた恩を忘れず、社会貢献したいと思っています。



さらん と や

薩仁図亜 (奨学生)

中国 (内モンゴル)

明海大学 応用言語学研究科 応用言語学専攻

日本での留学生生活において

苦しかったことと嬉しかったこと

私は、2006年4月に来日した。もう早いもので6年半になった。日本に来てから、初めて寂しい一人暮らしをした。初めて公衆電話で母の声を聴いて泣いた。初めて生きるためにアルバイトをした。留学生生活におけるいろいろな人生の初体験が私を成長させている。

留学生生活において苦しかったこと、嬉しかったことといえばいくつか印象的なことがある。その中で、今も思い出したら心が痛むほど苦しかったことがある。それが、2011年3月11日の東日本大震災だ。当時私は千葉県浦安市に住んでいた。学校帰り、家に入ったところで地震にあった。最初は揺れていると思ったが本棚や鏡などが倒れはじめたので、外へ逃げた。外で立っていたら周りの建物がひどく揺れて、地面が割れていき、すぐ地面から泥水が出始めた。浦安市は液状化で一時期ニュースになった。私の借りていたアパートが半壊したため、地震発生後、市役所の指定した避難所で三日間過ごした。停電、断水は普通

のことだったが、精神的にショックを受けたことがとても苦しかった。でも、日本政府や全国各地のボランティアが被災地応援を手早く進める姿を見て、私も精神的なショックから脱することができた。自然災害は酷かったが、あの年の桜には本当に癒された。

地震の苦しかった経験から、私はいろいろなことに興味が向かうようになった。地震の時に留学生として心細かった経験から、私ももっと誰かのために自分のできることをしてあげたいという気持ちになり、育英友の会、千葉県外国人児童進学説明会などでボランティアスタッフをした。特に、外国人児童進学説明会では、千葉県の学校に在籍する外国人児童の勉強への熱意に感動し、力をもらった気がして非常にうれしかった。

私の留学生生活まだ続いている。今は自分の将来のため一生懸命勉強に取り組んでいる。毎日いろいろなことが起きて、すべてが人生の良い経験になっている。



孫 羽 (奨学生)

中国 (江蘇省)

千葉大学 理学研究科 地球生命圏科学専攻

日本での留学生生活において

苦しかったことと嬉しかったこと

6年前、私は未来への夢を抱きながら、日本への留学の第一歩を踏み出しました。山のような荷物を持って空港のエスカレータの側で困っていた私に、“お手伝いしましょうか？”とある方が優しい声をかけてくださいました。その方は、母親のように世話をしてくださり、駅まで連れて行ってくれました。優しい日本人、綺麗な風景、私はこんな素敵な日本に感動しました。

最初日本に来たころは、言葉と文化の違い、勉強や日常生活に大変苦労しました。授業中ですら、身振り手振りようやく自分の意思を伝えられる状態でした。お金を稼ぐため、いつも満天の星と一緒に、徹夜でアルバイトをしました。疲れて少しでも仕事に遅れると、店長によく怒られました。中国人はもともとカラスの鳴き声が嫌いですが、いつの頃からか「カッ、カッ」の鳴き声がいつも一人ぼっちの私を慰め、孤独感を消してくれました。

その頃、年齢によって私の記憶力も落ちはじめ、辛さが増しました。しか

し、私は中国の詩“梅の花の良き香りは、苦しき寒さから生れる”を思い出すと、自分の心を強くすることができました。いくら苦しくてもめげないと信じ、千葉大大学院に進学しようと目標を立てて必死に勉強しました。身長半分ほどの厚いノート、印字薄くなったキーボードとぼろぼろの辞書が私の努力の証でした。周りの日本人からもいろいろなことを教えてもらい、“お手伝いしましょうか？”の言葉もよく聞かせていただきました。一年後、院生試験に無事に受かりました。しかも、留学生の中で一位になることができました。皆の気持ちをいっぱい頂いた私はいろんな文化交流のイベントに参加して、僅かな力ですが他の方をお手伝いすることができました。“お手伝いしましょうか？”も私の口癖になりました。

留学生生活を通じて、根性、恩返し、人助けによって、自分自身も楽しくなれると信じています。そうした気持ちでこれからも人生に果敢に立ち向かっていきます。



ó ÷ " J + ý 7 J

Ó10 v 16 ¥ 9 # Ñ í ~ E í á 0 # Ñ s t ^ @ 7 Ý r W Z
Ä í È Ý × í t & K t T \$ Ú @ ^ : b c 6 u Z T ð, K
b 3 o @ S C I t [A Z O S F b ~ b) @ È @ W S | : T



ž ' p

Ó10 v 27 ¥ ç Ú | « ± á l t (H 2 3 á 0 # Ñ ~
- ç Ý + ~) @ O b | - % ± 0 4 \$ \$ ^ 1 " & i
t K ¶ ¥ p b > • \ \ • \ b ð Û _ ¶ K
K Z C € S

Ó11 v 17 ¥ ... (l t (H 1 0 á 0 # Ñ p \) @
~ 3 Ç [6 × µ Ç i t 0 ¼ e K Z C € S p \
\ ¥ • t / œ W S ~ ¶ S ~ K Z 8 y G W Z 8 •]
È > È l t b © - U w t v M W ? ~ (ð [^ p
1 • _ ^ W S

Ó12 v 7 ¥ j " á l t (H 1 8 á 0 # Ñ È ° ¼ Ò)
@ • \ b ð Û _ ¶ K K Z C € S È ° ¼ Ò [¥
(Ò 0 ¼ & k b ¼ 4 \$ & k (\ K Z 2 q ð M • \ b G
\ Ò < b q 3 _ t ... K S 8

Ó12 v 23 ¥ ³ ™ í Ä ~ > á © (H 2 2 9 # Ñ 8 Q
\) _ 6 × # è 1 # Ñ 0 3 . 1 4 Ý B b - ¼ ^ È T Q : T

Ó12 v 25 ¥ ð 7 . @ l t (á 0 # Ñ p \) @ j Û
« ð « b ¥ _) g K S
> u [\ : >



z ¼ p i t = 4 ° i ~ Š V @ Ä ² °

~ ö { [Æ C

Ó11 v 3 ¥ S ¥ _ " - b q # . t \$ Û [8 ~ \ ¥
c ± Æ t K Z & K C Ž • G \ @ [A S



10K O ; E ¥ E ç ®

Ó12 v 4 ¥ µ æ w z & b 10K ð 0 ~ á @ 6 ~ O S F
æ / ² @ 7 j g • K S 6 ä b ¥ j K b p s H \ ² (@
ð 2 n K S > \$ B €] >

O Ô ç # J õ

12 % d 4



9 # Ñ í á 0 # Ñ b
\$ Ú l t c @ l b œ
6 è t ` W Z È B j
s b ² á « t ` 7 a
K Z C € r K S (ð
) K ? W S [M
> 6 ~ @ \ : >

